

2007年

03号

学術の新しい風

～見えないものを見るために～

New Research
Initiatives
in Humanities
and Social
Sciences

人社プロ

独立行政法人

日本学術振興会

人文・社会科学振興プロジェクト研究事業

New Research Initiatives in Humanities and social Sciences

人社プロ・ニューズレター

巻頭エッセイ：

「共同研究と社会提言」



沖 大幹

東京大学 生産技術研究所 人間社会系部門 教授

専攻：土木工学、地球水循環システム

著書：『水の世界地図』（監訳）など

筆者は工学系であり、当初は人文科学と社会科学の違いもよくわからなかった（あるとき理学と工学の違いに対応すると考えればよいことがわかった）。人文社会科学に携わっている方々からすれば理系の研究者はプロジェクト研究に慣れていて、研究も共同で行うのに向いているに違いない、と思っているかもしれない。確かにそういう分野もあるかもしれないが、筆者の経験では、やはり研究は1人でやるものであり、よほど役割分担がうまくできない限り真の意味での共同研究は難しい。

では、共同研究とは名ばかりで、実は個人研究の寄せ集めに過ぎないのか、というと、必ずしもそうではなく、体系化された知識や書物、デジタルデータなどの共有、予算申請や事務処理体制や発表・出版の場など研究リソースの共有、そして何より折に触れて会って議論することによる研究モチベーションの共有、という風に、うまく共同研究を運営すれば、相補的に研究内容を深められたり、効率的に研究を進めたり、くじけずさぼらず研究を進めたりするのに大いに役立っていることと思われる。

他方、優秀な研究者の中には、「すばらしい研究をして学問を支え伝えているのだから国が支援して当然であり、もっと厚遇してくれてもいいくらいである」と思っている方々もいるかもしれない。しかし、過去に思いを馳せてみれば、好きに研究ができた人や時代は例外であり、多くは教師や宗教関係者として禄を食みつつ私的な時間を研究に捧げるのが普通だったのではないだろうか。運よく理解のある、あるいは酔狂なパトロンが見つけられた場合には研究に没頭できたかもしれないが、パトロンのご機嫌を量りつつ時に喜ばせたり感動させたりする必要があったことだろう。



国際共同研究は大変だが楽しみもある。ドイツ、カッセル市にて。

予算配分システムの透明化が進み、以前にはかなりの裁量権を持っていた官僚を納得させたり、威厳で（？）押し切ったりしていれば研究予算に与れた時代は終わった。国家予算の元を払っている国民の支持が得られなければ、無駄だといって切り捨てられる時代である。大学の先生は自分の好きなことだけしてろくに出勤もせず楽して税金から給料をもらっている、などと曲解されぬよう、学問の楽しさ、大変さ、喜び、苦しみを余すところなく社会に伝えて、ぜひ大学やそこで働く教育研究者への理解とサポートが得られるようにしたいものである。

「医療システムと倫理」

「看取り」

清水 私たち「医療システムと倫理」グループの活動成果として「高齢者の看取り」をテーマにした本を出すことになりました。看取りに関しては実感として感じている話があります。妻の母親は徐々に衰えてきて同居しており、介護保険のお世話になってますが、ケアが良いと要介護度が進まないのです、かえって家族に負担がかかってしまうという問題があるんです。

吉田 今のお話は介護する側にとっても問題になっています。先日、テレビの介護特集番組に出演していた「カリスマ介護師」という人が、一生懸命ケアをすると要介護度が下がり、施設の収入が低下してしまうという現状を述べていました。

清水 そのカリスマ介護師というのが、どうやってそこまで成長したのか興味がありますね。介護師としての人生のサイクル、見通しが立たないと介護についても身が入らないわけですから。

吉田 彼にしても 20 年後どうなっているのかというのは考えてしまいますよね。

清水 介護する側、される側、両方にとって問題がありそうですね。私の実の母は東京に住んでいるのですが、数年前に大きな手術をしました。現在は膵臓ガンで先は長くないのです。そういうことで私は両方の母の高齢の衰え方、最後の生というものの典型的な二つの方式を見ているような気がしているんです。

吉田 今の制度は、政府が要介護度に応じて数量と価格を決める制度になっているので、どういう要介護度の人が施設に来るかによって施設の収入が決まってしまう。だから、要介護度の高い人が望ましいし、良くならない方がいいという現状になってしまっています。



対談者

清水哲郎

東京大学大学院人文社会系研究科 教授

専攻：哲学

著書：『医療現場に臨む哲学』、『医療現場に臨む哲学Ⅱ ことばに与る私たち』

介護師の評価、介護施設の評価

清水 介護の問題は、相手を人間として大事にするという、倫理的な態度と連動しているように思います。

吉田 そうした介護の質が、属人的なものとしてだけでなく、サービスとして確保されるようになる必要もありますね。個人に備わっているとしたら、その人が現場から離れたらまずいことになる。

清水 評価システムの問題に関わってきますね。

吉田 頑張っている、質の高いケアをしている施設に高い診療報酬を与えるという話もあります。しかし、現状の医療施設の評価はサービスの質ではなく、マネジメントの話が中心なんです。

清水 機能評価を受ける前になると、病院の待合室に「当病院はインフォームドコンセントを心掛けています」とか張り出される。今のお話にあった「マネジメントをやっている」というアピールですね。

吉田 実際には、マネジメントと提供されているサービスの質、両方を評価しないといけなはずなんです。それを評価するのは医療施設ですら、難しい。介護は医療よりも人間的な営みになってくるわけですから、なおさら難しくなる。その時にどうやって評価するのかということが重要な問題で、この点は清水先生の分野の話じゃないかと思います。

アウトカムの評価：「学融合的な課題」

清水 介護についてはどうマネジメントをするか、どう体制を整えるかはっきりしていないような感じがします。

吉田 医療サービスの評価はイギリスで盛んです。Quality Adjusted Life Year（以下、QALY）のように、研究や治療に使うお金を決めるために病気が治ったときの便益を数値化し、コストに比較して、QALYが高いところに優先的に国家としてお金をつけていくという発想なわけです。

清水 それ自体、僕は賛成しないけどね（笑）。

吉田 これは経済学の立場から見ても疑問があるんですね。高齢者の場合は高齢者一人だけの問題ではなく、高齢者の家族の問題になる。だからその周りの家族の便益について考える必要があるのではないかと思います、私も以前から関心があったんです。

清水 私もです。ただ、家族と本人は必ずしも一枚岩ではありません。家族が介護の負担の問題から、もっと本人を入院させておきたいがために、「胃ろう」をつけることになったという話もあります。

吉田 胃ろうをつけておくと、療養型病床の診療報酬が高くなるから、という病院側の事情もありますね。

清水 なるほど。「社会的入院」という言い方があるけど、そういう意味では「社会的胃ろう」と言えますね。

吉田 たとえば、胃ろうだった人を中心静脈栄養が必要な病気の人ということにしてしまうこともあると聞きます。最近の制度改革の影響で、そうしなければ病院の経営が立ち行かなくなる可能性がある。医療システムが却って病気をつくり出すという状況になってきている。

清水 「社会的中心静脈栄養」というのもあるんですね。

吉田 本当はそんなことは必要ないのに、皆がそうしてしまう。

清水 もう一つ、患者、家族の側から言うと、本当は自分が信頼してずっとこれまで病気を診てくれていた先生に最後まで診てほしいわけですよね。しかし療養型病院がなくなって、在宅に戻ることになると、そこで先生との縁が切れる。地域医療のネットワークで暮らしていかないといけない。それは相当ストレスだと思うんです。

吉田 アウトカムの評価が難しいことと関係があるように思います。

清水 制度的な問題については、患者対医療者の人間関係をどう見て、政策を立てているのかなあといった問題も感じるんですね。

吉田 政策というのはコストとアウトカムの相対的な関係で決めるもののなのに、コストの方ばかり見てしまう。今回の医療区分の導入なんかも、アウトカムはどうなるのかという話は全くないんです。アウトカムがちゃんと評価されないと、患者側も医療提供者も良いサービスを受けられなくなってしまいます。では、一体誰がどう評価するのか、これこそが大問題。「学融合的な課題」なんじゃないかなと思います（笑）。



対談者

吉田 あつし

筑波大学大学院システム情報工学研究科教授

専攻：経済学

論文：「1997年自己負担率の改定と歯科サービスの需要及び供給の変化」（『医療と社会』所収）

プロジェクト紹介 1:

産む・産まない・産めない

「産育の現場からの考察」



代表者

松岡 悦子

旭川医科大学医学部 准教授

専攻：文化人類学、医療人類学、
ジェンダー論著書：『産む・産まない・産めない
—女性のからだと生き方読本』（編著）

New Research Initiatives in Humanities and social Sciences

人社プロ・ニューズレター



政策という視点から行ったシンポジウムの写真。

いま、女性は産まないのか、産めないのか。産む力を持っているのだから、いつかは使おうと思っているうちに 30 代半ばを過ぎ、生物学的なタイムリミットを意識させられる女性たち。『カチャ・クルマン 32 オー産まないって決めたわけじゃなくて』（カチャ・クルマン著 新水社 2007 年）ということばに表されるように、女性たちは産みたくないのではなく、産む条件がそろわないのだ。「いったい誰のせいでこうなったの？」と女性たちは聞きたいのに、まるで産まないのは女性の責任だとでも言わんばかりの政治家たち。産むことは、最終的に女性の体を通してなされる。そのため、産むことも産まないことも産めないことも女性のこととされがちだ。本当は、男性の側の問題や、長時間労働、セクシュアリティ、不平等な男女関係、経済不況などさまざまなことが関係しているのに。さらに最近では、産科病院が閉鎖されて産み場所が近くなっている。それで自宅や助産所で産もうとすると、今度は「安全ではない」と言われたりする。周産期死亡率が最も低いのは助産所なのに。

こんなふうに、女性に備わった産む力（その裏返しとしての産まないこと、産めないことを含めて）をめぐって生じるさまざまなことがらをリプロダクションと呼び、歴史、ジェンダー、助産学、医学、文化などの視点から研究するのが、第 IV 領域「豊かな人間像の獲得—産育の現場からの考察」のプロジェクトだ。今年の 1 月に『産む・産まない・産めない—女性のからだと生き方読本』講談社現代新書（2007 年）を、メンバーで執筆し出版した。

このリプロダクション研究には 3 つの視点がある。一つは政策の視点で、それは社会の維持が産むという女性の行為を通してなされるために、女性の体が政策のターゲットになるからだ。2 つめは、自然と文化という視点で、人間は生理的には同じ一つの生き物だが、文化的には多様なリプロダクションの形がありうるから。3 つめは、医学という現代もっとも信仰されているパラダイムを疑ってみることだ。出産に関して、今もっとも信頼されているのは医学的な知識だ。でも出産を医学ととらえることで私たちが失ってしまったものも大きい。たとえば産む喜び、自信、達成感、人権。もちろん困ったときに医学は必要だ。でも医学は、それが必要とされないときが人間にとって最も幸せな時という点で、もともとパラドキシカルなものだ。人は健康なときには医療に頼ろうとは思わないのだから。

リプロダクションに関して言うと、医学という枠をはずすことはとてもむずかしい。なぜって、それは「安全性」を手放すことのように思えてしまうから。でも一方で、医学の枠をはずさないと見えてこないものがあり、それを見えるようにするのがこのプロジェクトの大きな目標でもある。出産のパラダイムシフトは安全性や選択、権利といった価値観を変えることにもつながっていく。



自然／文化の視点

布でぐるぐる巻きにされたジャワ島の赤ちゃん何もつけないベトナムの赤ちゃん。

プロジェクト紹介2:

モンゴル帝国時期のカルテ

社会制度の持続性に関する
学融合的研究

代表者

加藤 雄三

総合地球環境学研究所助教

専攻：法史学

著書：グループの成果を『東アジア内海
世界の交流史：周辺地域における
社会制度の形成』（人文書院）とし
て刊行予定

New Research Initiatives in Humanities and social Sciences

人社プロ・ニューズレター

自分自身のものでも病院でカルテに目を通すことは少ないだろう。ましてや他人のものなど、現代の感覚では、プライバシーにさしさわる。あの有名人はどんな病気に何が原因で罹患したのだろう、という疑問に時空を越えて答えてくれる資料が大元ウルスで編纂されたことはあまり知られていない。羅天益撰『衛生宝鑑』がそれである。

羅天益の郷里、藁城（今の中国河北省藁城市）は、早い時期からモンゴルに帰服したため、彼はグユクからクビライのモンゴル帝国で医師であったことになる。その患者は、士人の家族、兵士からモンゴル政権の要人にまでわたる。よく知られたところでは、劉秉忠、史天沢、姚枢、ハルガスンなど、クビライ政権の中樞がいた。また、羅は歴史の貴重な証人でもあった。彼の拠点は真定（河北省正定市）だったが、カアンの命によって、四川攻軍時の六盤山（1253）、ジャウクト（後の上都）、建設して間もない大都、宋蒙戦争の最前線たる揚州（1256）、李壇の役における済南（1261）などの重要な現場にいた。

モンゴル帝国時期の人々はどんな病気に苦しんでいたのか。今に通じる病いはあるだろうか。

1257年に従軍して汴梁（開封）に至ったときのこと。役者の李人愛が羅に言った。「長男はこの7月に疲れて冷めた茶と飯を飲食してしまい、膨満感を覚えたため、医者治療してもらいました。医者が投薬した結果、症状は改善したのですが、また冷めた物にやられて、膨満感だけでなく全身のだるさや吐き気を覚え、飲食も困難になって、言葉もあまり話さなくなりました。同じ医者の診断で、腹下しをさせればすぐに治癒するというので、無憂散に牽牛末を加えて飲ませたのですが、夕方になって悪化し死んでしまいました。」これは薬が悪かったのだろうか。羅は言う。「薬のせいではない。見立て違いだ。根拠ある投薬でなければ、逆効果になる。」ごく初歩的な医療ミス、ヤブ医者の事例である。同様の事例は『衛生宝鑑』内で枚挙にいとまがない。

鎮陽（恐らく真定の雅名）の一士人の例。彼は剛毅な人物で、人ともよく交流し、大望もあった。30歳すぎで、官位も進み、振る舞いも衣食も思うがままだったのに、失脚した。鬱屈が溜まり、精神的にも滅入ってしまい、見た目にも憔悴し、酒に溺れ、やがてパンパンに膨れてしまった。他の医者に診せても原因が知れず、羅が診察したところ、脈も不安定で、絶えずもだえ苦しみ、吐き気をもよおし、ため息ばかりしている。羅いわく、「この病は治療が難しい。かつて栄華を極めた者が没落すれば、精気は絶えて、あらゆる意味で失調する。」と。昨今のヒルズ族はこれくらいではへこたれないようだが、現代に置き換えても身につまされる話だ。

面白い症例は他にもあるが、それらはいずれまた。

参考文献

陳高華「羅天益与『衛生宝鑑』」（『文史』48 1999）



忽思慧撰『飲膳正要』
巻1「飲酒避忌」

活動報告 1

『市場』を使いこなすために

近年の「構造改革」は「規制緩和・市場機能の重視」を掲げていますが、現実の市場は、「官か民か」という単純な二項対立では語り尽くせない、様々な制度に支えられて機能しています。市場は自律的なメカニズムであると言われるものの、適切な制度的裏付けを欠くときには、耐震偽装問題のように、消費者の安全や利益を大きく損なう結果をもたらしかねません。「市場に振り回される」ことなく「市場を使いこなす」ためには、どのような仕掛けが必要なのでしょう。私たちのグループでは、同様の問題関心を持つ海外の研究者とも連携しつつ、私的なアクターによる「自主規制」の仕組みなど、市場をうまく機能させるための様々な具体的取組みの現状と問題点を明らかにすることを目指しています。研究を通して、私たちが「市場の時代」を生き抜くヒントを示すことができれば、と思っています。

藤谷武史（北海道大学准教授）



《国際ワークショップ：2006年3月・Cambridge, MA, USA》

活動報告 2

第5領域横断フォーラム「誘惑と越境 第1部」

2007年5月30日(水) 京都大学文学部・新館地下会議室(企画担当委員 岡田暁生、吉岡洋)

現在の人文科学、とりわけ大学における人文学が失いつつあるのは、専門を超えて人々を「引きずり込む」力、視界を狭められゴールに突進させられる競走馬に別の世界の可能性を垣間見させる力、一言でいえば、「誘惑する」力なのではないのか。そして、この力を取り戻すことこそが人文学再生の、その社会的力の回復の道ではないのか。こうした問題意識のもと、京大人文研の大浦康介氏をゲストに、本フォーラムは開催された。

氏の講演は、誘惑という問題系の西欧的起源と展開を、そのキリスト教的文脈と共に、文学と美術から豊富な実例を引きながら、文字通り誘惑的に私たちに示してくれるものであった。氏は、誘惑の悪魔的、ドン・ファン的側面を認めつつ、それを積極的な力、私たちが他者に向けて開いていく力として捉えようとする。会場には、学部学生を中心に多くの聴衆が詰めかけ、パネリストだけでなく、会場との間にも活発な質疑が交わされ、問題への関心の高さを伺わせた。

山田広昭（東京大学大学院 教授）



当日の会場の様子。活発な議論が交わされた

風を受け、舵をとれ シリーズ・人社の若手たち： どのような未来を望むのか

円山応挙の東山三絶図は東山からみた京の町並みを描いた江戸時代後期の水墨画。左には東寺の五重塔が遠くみえる。景観は時代とともに変わり、もちろん現在の東山からの眺めは応挙の時代とはちがう。

高度成長期以降の急激な景観の変化による景観問題への反省から、景観条例を定める地方自治体が増えている。私の住む京都市でも、建築物や屋外広告物の高さやデザイン制限をふくむ新景観条例が今年2月に可決された。

景観条例は、望ましい景観を享受する未来世代の権利を守るために、現在世代の自由を制限する。この発想は環境倫理学者のいう「世代間倫理」に近い。では、望ましい未来の社会像について、どうすれば現在の私たちは合意形成できるのか。——こんなことを地球環境問題を研究する場にいる私は考える。これは人社プロの趣旨・目的である社会提言にも関わる問題だろう。

松川太一（総合地球環境学研究所）



東山三絶図（円山応挙筆・大和文華館蔵）

自著を語る：

「動物実験の生命倫理」― 個体倫理から分子倫理へ―

本書は、生物好きの私が、生命についてより深く識ろうと歩みを進める過程で、ぶち当たった壁、そしてそれをいかにして越えるかについて悶絶する過程を記した書です。その悶絶とは、生物を愛しているのに殺さねばならないという葛藤なのです。

小学生の頃は、動物を愛するがゆえに、動物を近くで見ていたい、飼育してみたいと、動物（特に昆虫）を捕まえてきては、飼育・観察し、幸せな日々を送っていました。ところが、動物の美しさやすごさを理解するために、科学的手法を選択したところ、動物を殺さねばならなくなりました。解剖（分析）によって再現性のある（確実な）事実をつかむためです。

この葛藤を超えていくために、先人の書を紐解いてみたのですが、どうにもしっくり来ない。自分の理性と感性に忠実になってみて行き着いた感覚を「分子倫理」と名づけてみたのです。この分子倫理が、解体される動物の仲間である人間を変えていくことを願っています。

大上泰弘（帝人ファーマ・主任研究員）



実験動物慰霊祭

（研究者にとって慰霊行為には、どんな意味・価値があるのだろうか）

人社キーワード： 『分配的公正』

社会に導入されたインフラは、その直接的な使用目的（例えば、ダムができて灌漑や防災の効果が向上する）を遙かに超えて、社会全体の編成基準や持続性にまで影響を及ぼすことがあります。開発されたインフラの工学的あるいは経済的視点のみに注目を集めてしまえば、インフラの実際の社会における社会的効果や影響は考慮されなくなります。私たちの研究グループの興味は、特定の問題を解決するために導入されたはずのインフラが及ぼす、環境面への悪影響、経済的悪影響、さらには人々の協力や支配従属関係をも規定するような「政治的作用」を明らかにすることにあります。具体的には、技術の政治的作用による分配の公正に焦点を当て、1）選択肢拡大の媒介としてのインフラ（技術）の大義と効果、2）技術メカニズムによる資源配分効果、3）時代ニーズに対応する安定的効果、4）選択の逆戻りが及ぼす効果、の観点から事例研究による分析を試みています。

湊隆幸（東京大学大学院新領域創成科学研究科）



サン・パウ病院（世界遺産、バルセロナ）

サン・パウ病院は、貧困な人々だけの病院として建設されたが、内装には花や天使の装飾、大理石やステンドグラス、綺麗な色模様のタイル等、患者に安らぎを与える為の装飾や部材があしらわれている。これは、設計者ドメニクが埋め込んだ“癒し効果”だけでなく、優れた医者を招くための“仕掛け”であるとも言われる。このように、技術の働きは、目に見えにくいところで主目的を超えた効果を発揮する。

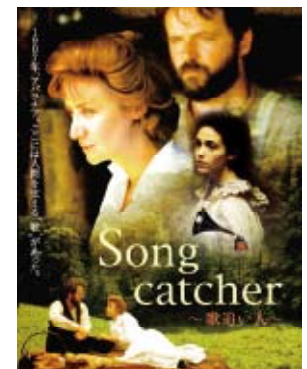
芸術ナビ：

映画『Song Catcher～歌追い人』

これは音楽学者を主人公とした大変珍しい映画である。20世紀初頭のアメリカ。男性中心の大学で教授昇進を拒否された女性の民謡研究者が、失意の内にアパラチアの山奥の学校に向かう。そこで彼女が「発見」したのは、いまだに生活の中に息づく古いスコットランドやアイルランドの民謡だった。「科学的」な歌の採録に着手した彼女は、「俺たちの歌を盗むのか」と反発も受けながらも、歌が息づく彼らの生活の中に溶け込んでいく。そして、火事で全ての研究成果を失った彼女は、彼らの歌を録音して多くの人に聴いてもらうために、愛する山の男、彼女の調査を手伝った少女とともに山を降りるのである。

音楽の「研究」から遠ざかるのが良いことのように描かれているのは残念だ。だが、歌をめぐる人生にどれだけ肉薄できるかが、音楽研究において大事であることを思い出させてくれる映画である。

福岡正太（国立民族学博物館・准教授）



『Songcatcher～歌追い人～』

発売・販売元 松竹（株）映像商品部

DVD 発売中
¥4,935（税込）

未来を拓く人文・社会科学： シリーズ刊行開始

ご存じの通り、人文社会科学振興プロジェクト事業は、現在、5領域、17プロジェクトが行われています。そのうち4領域については今年度末で事業が終了予定。これまでの成果を一般の方々にもわかりやすい口調・筆致でお伝えする図書として刊行することになりました。このほど東信堂から出版が開始され、シリーズ1～3号が出版されました。

『科学技術ガバナンス』（城山英明編）、『ボトムアップな人間関係ー心理・教育・福祉・環境・社会の12の現場から』（サトウタツヤ編）、『高齢社会を生きるー老いる人／看取るシステム』（清水哲郎編）の3冊。はからずも、第3領域「科学技術や市場経済等の急速な発展や変化に対応した社会倫理システムのあり方について研究する領域」から3冊が先陣を切ることになりました。

『科学技術ガバナンス』では、進歩の著しい科学技術を社会はどのようにマネジメントしていくべきなのか、ということについて安全リスク、安全保障リスク、倫理的配慮、研究の自由の確保といった多様な観点から論じています。『ボトムアップな人間関係』は、医療・教育・福祉など、職業上発生する人間関係について、単なる技術や便宜の供与と考えるのではなく、人間関係そのものから考えてみようという提言です。『高齢社会を生きる』は高齢者と医療との関係に焦点をあて、意思決定、コミュニケーションと看取り、システムとしての高齢者医療の現状と課題、などが扱われています。ぜひみなさんも手にとってみてください。

ニューズレターでは、今後もこのシリーズの刊行状況や内容についてお伝えしていきます。

なお、背番号ゼロとしてシリーズの一翼を担っている『紛争現場からの平和構築』（城山英明・石田勇治他編）もあります。問題が重要であることはもちろん、学融合を目指してチャレンジしてきた人社プロジェクト全体の雰囲気も味わえます。（編集部）



編集後記

今、ちょうど立命館大学では学園祭をやっています。人だかりの企画を覗いてみたら、手話サークルによるダンスでした。はやりの音楽にあわせて手話でダンスを組み立てて語りかける若者たちが少しまぶしく見えました。（編集長s）

「介護」の問題は深刻ですよ。清水先生の著書を拝読して、自分自身や家族の「終末」についても、きちんと考えておかないといけないな、と実感しました。（事務局i）

「人文・社会科学」と言っても様々な学問が存在していることを身体で感じられ、編集作業がとても楽しいです。寒い季節になりましたが、これからも熱いニュースをお届けします！（編集見習いh）

目次

巻頭：「共同研究と社会提言」	1
対談：「医療システムと倫理」 清水哲郎 × 吉田あつし	2
プロジェクト紹介：1 産む・産まない・産めない「産育の現場からの考察」	4
プロジェクト紹介：2 モンゴル帝国時代のカルテ「社会制度の持続性に関する学融合的研究」	5
活動報告：1 『市場』を使いこなすために／	
活動報告：2 第5領域横断フォーラム「誘惑と越境 第1部」／	
風を受け、舵をとれ シリーズ・人社の若手たち：どのような未来を望むのか	6
自著を語る：「動物実験の生命倫理」ー個体倫理から分子倫理へー／	
人社キーワード：『分配的公正』／芸術ナビ：映画『Song Catcher〜歌追い人』	7
未来を拓く人文・社会科学：シリーズ刊行開始／編集後記	8

○編集：「学術の新しい風」編集委員会

編集長：サトウタツヤ（立命館大学・教授）

第3領域の「ボトムアップ人間関係論の構築」
グループリーダー

編集担当：日高友郎（立命館大学・学生）

デザイン：三村豊（東京大学生産技術研究所・学生）

事務局：小暮、糸井（日本学術振興会研究事業課企画係）

○発行：独立行政法人 日本学術振興会
研究事業部研究事業課

人文・社会科学振興プロジェクト研究事業担当

住所：〒102-8472 東京都千代田区一番町8（FSビル7階）

電話：03-3263-4645

Email：jinsha@jsps.go.jp

http://www.jsps.go.jp/jinsha/

○印刷：株式会社 創造社